

IV 音楽 1年次の成果と課題

1 成果

(1) 「楽譜を深く読む」ことを通して生まれる豊かな表現を実感する子どもの姿

曲との出会いの場面で、作者からのメッセージと作者自身の歌う姿を視聴する場を設けた。このことにより、曲を通して作者が伝えようとしていることを受け止め、今の自分たちと歌詞の内容を重ね合わせる姿が見られた。「友達のことを考えながら歌いたくなった。」「今の生活がとても大切に思えてきた。」など、曲を自分の近くに感じているようで、《ぼくらの日々～6 A ver》としてオリジナルの曲にしたいという思いが生まれてきた。曲を知るために「楽譜を読む」活動はこれまでも行ってきたが、どのように歌いたいのかを、「音楽のもと」と結び付けその思いを言語活動により伝え合う活動を設定したことで、よりよい表現へとつなげていくことができたと考える。曲に対して自分の思いをもつためには、曲をよく知ることが不可欠である。楽譜には音符以外にも様々な記号が記されており、その一つ一つに大切な意味がある。なぜその記号が付いているのか、その記号によって音楽にどんな効果が生まれているのかを考えることで、音楽の表現力は高まっていく。曲にこめられた思いを引き出し、伝えるのは、子ども自身の「気付き」なのであるから、「楽譜を深く読み解く」ことは、豊かな表現へと結び付いている。

B児は、次のように自分の学びを見つめている。

～B児の振り返り～「今日は、前とは歌い方が変わりました。前までも十分歌はうまかったけれど、何か足りないなと思っていたことが、今日分かりました。それは、6 Aの日常と重なっているように感じたということです。歌っているとき、いつもの日常が頭に浮かんで、歌っていてとても気持ちよかったです。6 Aの思いをしっかりと歌に込めることができてよかったです。」

B児のような子どもは多く見られ、思いをもって歌うことでよりよい表現になるということを実感している姿であると考えられる。

(2) 思考・判断と表現の一体化を生み出すための「音楽のもと」を意識した学習展開

授業の導入段階では、自分たちの現状を省察する時間を設けた。困っていることやうまくできていないことは何か、よりよい演奏にするためにはどうしたらよいのかを出し合い、表現につなげていくことで学びを進めていった。子どもの困り感から生まれた「音楽のもと」である強弱に着目し、強弱を工夫して表現する「ものさし」を働かせた。音楽記号でフォルテと記されているから強くすると分かってはいても、実際に声に出してみると、どの状態がフォルテなのか、表現できているのかいないのか、よく分からない子どもたち。そのようなタイミングで、「演奏する役」「聴き役」を交互に行う場を設定することで、それぞれの立場からフィードバックし合う協働的な省察となり、よりよい表現を求めながら演奏の高まりを目指す姿につながった。強弱を音楽記号として捉えただけではなく、技術的にどのように表現していくとよいのかという「ものさし」を身に付けた姿である。

C児は、次のように自分の学びを見つめている。

～C児の振り返り～「強弱は、その音をただ単に強くしたり弱くしたりするのではなく、その部分の前後にも関わってくると思いました。」

音楽記号の知識としての強弱だけではなく、表現すること実感することで強弱の感覚を身に付けることができた姿であると考えられる。

2 課題 十分な表現活動と（聴く力）を高める手立ての工夫

子どもたちが思ったり考えたりしたことを、声や音にして試行錯誤するための十分な時間が必要である。豊かな表現を目指して、思いを演奏につなげるための言語活動も大切ではあるが、実際に歌ったり音にしたりしながらでなければ効果的ではないと考える。さらに、自分の声はもちろん、他の人の声を聴いて表現の質について判断できる耳（聴く力）が備わっていなければならない。今後は、聴く力を育てていくための手立てを模索していきたい。